

# 立命館 MOT

Graduate School of Technology Management



## 大阪いばらきキャンパス(OIC)



## お問い合わせ先

立命館大学OIC独立研究科事務室  
(テクノロジー・マネジメント研究科)

〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町2-150

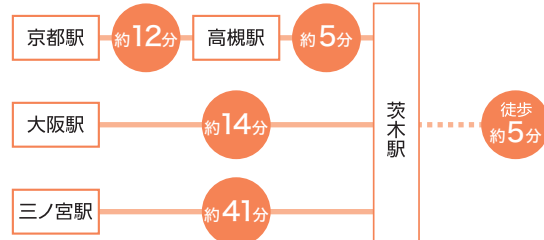
TEL:072-665-2100 / FAX:072-665-2109

E-mail:motkoho@st.ritsumeai.ac.jp

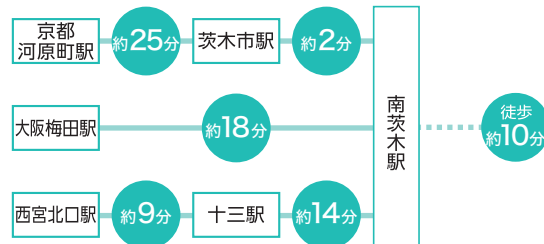
<https://www.ritsumeai.ac.jp/mot/>



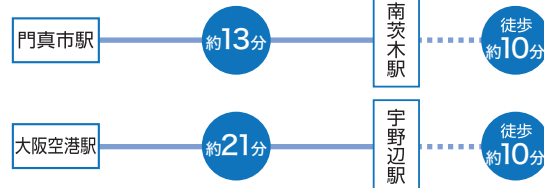
## JRでお越しの方は



## 阪急電鉄でお越しの方は



## 大阪モノレールでお越しの方は



※所要時間に乗り換え時間は含みません。

大阪いばらきキャンパス

2024年5月発行

立命館大学大学院テクノロジー・マネジメント研究科







# All for innovation, innovation for all.

立命館大学大学院  
テクノロジー・マネジメント研究科 研究科長  
湊 宣明 Nobuaki MINATO

立命館MOT(Management of Technology)は、技術経営とイノベーションを探究する大学院として2005年に誕生し、創立20周年を迎えます。この間、科学技術を基礎とした専門分野の技術・知識を戦略的にマネジメントし、イノベーションを創出できる人材の育成に努めてまいりました。修了生の数は既に898名(前期課程842名、後期課程56名)に達し、国内有数の技術経営大学院として持続的成長を遂げた成功例といえるでしょう。

なぜ立命館MOTは選ばれるのか。その理由は3つあると考えます。個性の尊重、多様性の確保、実践の重視です。

第一に、我々の大学院は、学生の個性を尊重し、個人がやりたいことを自由に探究できる時間と場所を提供しています。一般的な理系の大学院では教員主導で研究テーマを設定することが多いと思います。しかし、立命館MOTでは、原則として学生個人がそれぞれの問題意識を出発点として研究テーマを選択します。そのため、この大学院で扱うテーマは最先端の技術やビジネスから人間の感性、国際的な社会問題まで多岐にわたります。さらに、複数の教員がその研究を支援する指導体制は2005年の設立時から変わっていません。まさに学生の個性を中心に据えた大学院といえるでしょう。

第二に、我々の大学院にはきわめて多様な学生が集まっています。理系学生と文系学生、学部進学者と社会人経験者、日本人と留学生などが、講義中にグループを形成して学び合います。バックグラウンドの異なる学生がもたらす多様な価値観と知識が融合し、互いに刺激を与え合うことで、イノベーションの源泉となる斬新な発想が生まれ出されます。この融合環境を維持するため、研究室毎の独立した部屋と机を用意するのではなく、あえて大部屋方式を採用し、異なる研究室の学生が机を並べて自由に交流できるよう配慮しています。イノベーション研究の大家であるシュンペーターは「新結合こそが革新を生み出す」と主張しました。偶然の出会いや新しい組み合わせが自然に生まれる環境を大学院に作り出しています。

第三に、我々の大学院は、技術経営理論を知識として体系的に学ぶだけでなく、その知識を実践で応用できるようにするための教育設計をしています。MOTの研究者・実務家であるクリス・フロイドは「テクノロジー(技術)とは知識そのものではなく、知識の応用化である」と述べています。つまり、知識を問題の解決に応用できるようになってこそ、テクノロジーをマネジメントしたと言えるのです。そのため、多くの講義では過去の実例を基にしたケーススタディーやグループ演習を行うほか、商品企画やサービスデザイン、新事業開発、生産管理、プロジェクトマネジメントを疑似的に体験する機会も豊富です。さらに、課題解決型長期企業実習(プラクティカム)では、今まさに企業等が実務で直面する課題に対して、チーム一丸となってソリューションを設計し、経営陣にプレゼンテーションする機会を得ることができます。イノベーションを興すための実践的なトレーニングがこの大学院にすべて揃っているといえるでしょう。

すなわち、立命館MOTは、「価値観と専門性が多様に融合する環境で、一人ひとりがやりたいことを発見し、理想の未来をつくる大学院」として、これからも社会に貢献し続けます。大学院前期課程の2年間、後期課程の3年間で技術経営学という新しい学問に出会い、熱意にあふれた同級生と学び合いながら、それぞれの人生にイノベーションを興していただきたいと思います。

All for innovation, innovation for all.

(すべてはイノベーションのために。イノベーションは皆のために。)

## 教育の特徴

### 文理融合の開講科目

技術経営の基礎として、戦略論や組織論などの経営学、さらに統計、数理、ケーススタディなどの方法論について、幅広く学ぶことができる授業科目が提供されています。

### 多様な学生とのインタラクティブな講義

ワークショップやグループディスカッション、プレゼンテーションなど、インタラクティブな手法を取り入れています。社会人学生・留学生など多様なバックグラウンドを持つ学生同士が議論を戦わせます。

### クォーター制の採用

1年を4期に分けるクォーター制を導入しています。1科目あたり180分の講義を8回(2025年度から「190分×7回」)、約2ヶ月で履修できます。仕事と比較的忙しくない時期に集中して学ぶことが可能です。夏期集中やセメスター制で運用している講義もあります。

### 他研究科科目履修など柔軟な受講制度

研究活動の幅を広げるために、立命館大学大学院の他研究科の開講科目を一部受講することができます。また、科目等履修生制度や聴講生制度を利用して入学前に1科目から履修することも可能です。

### 実務経験豊富な教員・講師陣

メーカーや金融機関、コンサルティング会社などで実務を経験した教員が揃っています。また、現役の企業人を客員教授やゲストスピーカーとして招いており、業界を越えた知識や俯瞰的な視点を学ぶチャンスにあふれています。

### 企業でのアクションラーニング(プラクティカム)

理論と実践の習得をめざして、インターンシップを発展させた「プラクティカム」を実施しています。その特徴は、企業が抱える課題に学生が取り組む「課題解決型長期企業実習」です。

### 平日夜間、土曜日開講

立命館MOTでは社会人も多く受講しています。平日夜間と土曜日の科目だけで修了に必要な単位を取得することが可能です。社会人学生の場合、必要に応じて研究指導を平日夜間や土曜日に行います。土曜日開講の科目を多く設置していますので、働きながら無理なく学位を取得できます。

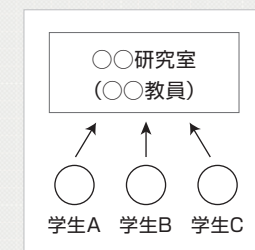
### ドイツへの海外長期派遣プログラム

立命館MOTとハンブルク工科大学大学院マネジメントサイエンス・テクノロジー研究科との間で、大学院生受入の協定Student Exchange Programが締結されており、6ヶ月～1年間の海外研究の機会が準備されています。

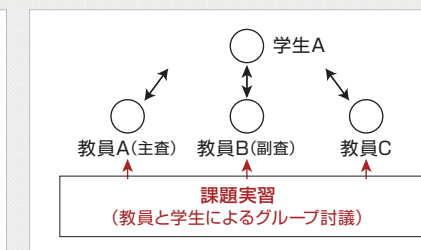
## 複数指導教員体制

MOTの研究範囲は広範囲におよび、技術戦略、ファイナンス、知的財産、組織戦略などを複合的に考察しなければなりません。そのため、複数名の教員で指導する体制をとっています。演習(ゼミ)指導や論文の主査となる教員以外に、複数の教員から指導を受けることが可能です。実際、メインとなる演習(ゼミ)に関わらず、他のゼミにも顔を出す学生が多く存在します。教員同士が連携をとり、課題解決に最適な解を見出せる体制を確保しています。積極的に多様な教員のリソースを活用してください。

従来の教育スタイル



テクノロジー・マネジメント研究科の教育スタイル



## 修士論文テーマ例

- 仮想空間技術が集団のコミュニケーションと心理的安全性に及ぼす影響
- スタートアップ企業における、創業目的に応じた経営課題とその解決策 —研究開発型スタートアップ企業におけるビジネス人材の役割—
- 感動駆動型宇宙利用における映像酔いの低減方法に関する研究
- 動的ペルソナを用いた人材像の設計手法に関する研究
- 中国のデジタルヘルスAPPに対する継続利用意図への影響要因に関する研究
- 日系電気自動車のスマートコックピットが中国消費者の購入意欲に与える影響
- バーチャルYouTuberの外見的特徴が視聴者の選択意図に与える影響
- 開発中の製品前倒しPRの信頼性 —スマートフォン産業を中心に—
- AIスピーカーの擬人化がユーザーの購買意欲に与える影響 —社会的認知と信頼の媒介効果—
- オープン・イノベーションにおける組織スラックが企業業績にもたらされる影響に関する研究
- 管理職の文化的知性が従業員の革新的行動に及ぼす影響 —心理的安全性を媒介変数として—
- 知識型リーダーシップが従業員の革新的行動に与える影響について —知識共有を仲介として—

## 博士論文テーマ例

- Maximization of Energy Safety Using Neuro-Fuzzy Systems (ニューロ・ファジシステムを用いたエネルギー安全性の最大化)
- E-commerce adoption in developing countries (発展途上国における電子商取引の適用に関する研究)
- バイオ医薬の創成期における組織間連携の時系列分析 —連携の目的とタイミングにおける日本と海外の違い—
- 電子デバイス事業における後発優位のメカニズム —イノベーションダイナミクスの与える影響—
- ノウハウ保護のための特許制度と方法の発明の保護戦略 —先使用権の法的解釈と方法の発明の保護戦略マトリクスの提案—
- 個別嗜好に対応するカスタマイズ商品の設計プロセスに関する研究



# 開講科目 (2024年度)

MOTでは2025年度にカリキュラムの変更を予定しています。

<b>基礎科目</b>	<b>展開科目</b>	<b>研究指導科目</b>
<b>コア科目(修了要件:6単位以上)</b>	<b>プログラム科目</b>	<技術経営演習Ⅰ・Ⅱ(各2単位)> <技術経営研究Ⅰ・Ⅱ(各2単位)*必修>
<b>修了に必要な単位数</b>	コア科目6単位以上と「技術経営研究Ⅰ」および「技術経営研究Ⅱ」の計4単位を含めて34単位以上必要です。 加えて、必要研究指導を受けた上で、修士論文を提出し、かつその審査および最終試験に合格しなければなりません。	

**設置科目一覧** ※設置科目一覧については今後変更になる可能性があります。 ※科目等履修制度、聴講生制度ではプラクティカムⅠⅡ・技術経営研究ⅠⅡは履修できません。

<b>技術経営論Ⅰ</b>	技術経営の全体像を把握し、グループ演習を通じて諸産業に潜む課題について学ぶ。本講義では、イノベーションに関わる経営理論を確認するとともに、企業の具体的な事例に触れることで技術と経営との関係を概観する。技術経営の概論的な講義に加え、グループ毎の調査報告を基にしたディスカッションを行う。	<b>技術経営論Ⅱ</b>	技術経営の事例分析と解決策の構想・提案を通して、戦略思考の理解と実践の基礎を学ぶ。本講義では、産業界や技術領域にとらわれず事例を検討することで、組織や戦略に関する理解を深める。課題として配布された資料に基づき理論的な論説および事例を検討し、プレゼンテーションを行い、その内容を討議した後、総括を行う。
<b>技術経営論Ⅲ</b>	技術経営の事例を理論モデルの視点から理解し、イノベーション創造の経営スキルについて学ぶ。本講義では、技術経営を理論と実践の両面から議論することで、イノベーションマネジメントの要諦を考察する。さらに、企業がイノベーション能力をどのように強化することが望ましいかについて論じる。	<b>戦略的技術開発論</b>	新製品・新サービスの収益化を目的とした技術戦略について学ぶ。本講義では、新製品・新サービスの収益化の基本としての経営戦略やマーケティングの重点をおさえた上で、イノベーション、技術戦略、研究開発マネジメントなどについて議論する。
<b>技術経営組織論</b>	経営組織について諸理論を整理した上で、イノベーションへの組織的対応を学ぶ。イノベーションが創造され実践される組織の在り方は、イノベーションの成功と失敗に大きな影響を与える要因の一つである。本講義では、組織構造、鍵となる人材の役割、仕事の組織化などの観点から考察する。	<b>技術基盤企業のマーケティング</b>	マーケティングの基礎知識を定着させつつ、市場ニーズを踏まえたプロダクトの設計手法を学ぶ。本講義は、マーケティングを理論的・体系的に学習したことのない者が、商品のコンセプト開発力を身に付けることを目的とする。最新のマーケティング事例や分析手法を紹介するとともに、プロジェクト演習により実践的なマーケティング力を身に付ける。
<b>会計・財務</b>	簿記の基本スキルを修得しながら、会計情報の役割と分析手法について学ぶ。本講義では、履修者が会計知識を有していないことを前提とした上で、財務会計の基礎知識から講義を始め、最終的にその本質的な理解を可能とする講義を行う。シミュレーション演習を行うなど、知識を体得できるよう工夫する。	<b>ファイナンス戦略</b>	企業における財務計画の策定と運用の要点について学ぶ。技術経営は中長期的な企業価値の向上を目標とするものであるが、本講義では、そもそも企業価値とは何か、そのためには資本調達と財務構造をどうすべきか、収益力と財務健全性の高い企業とするためにはどうすればよいのか等について学習する。
<b>技術基盤企業のヒューマンリソースマネジメント</b>	技術を製品やサービスとして具現化するための人材マネジメント、組織の動かし方について学ぶ。技術基盤企業にとって、技術だけでは製品やサービスを実現することはできず、製品化、事業化、産業化を実行する人材が必要である。本講義では、イノベーションを実現するための企業における人材活用の在り方について考察する。	<b>技術・知財関連法</b>	特許法等の知的財産法を体系的に俯瞰し、判例などを通じて知的財産制度の仕組みを学ぶ。本講義では、工業所有権法の学習を通じて、日本の知財戦略に対する政策を学び、企業がどのように知財を活用し保護しているかを考える。特許法、実用新案法、意匠法、商標法、その他、著作権法、不正競争防止法について学ぶ。
<b>知財戦略論</b>	知的財産シーズに基づくビジネスモデルを分析フレームワークにより提案する方法を学ぶ。知財戦略論は、市場分析、技術戦略論、及び研究開発論と密接に関係している。本講義では、分析フレームワークを用いて製品開発における市場分析を行い、技術戦略論及び研究開発論を学ぶとともに、知財権の基礎を学ぶ。	<b>技術・知財関連法</b>	デザイン/マーケット思考で、マネジメントツールによる価値創造を学ぶ。本講義では、「価値とは何か」、「価値をどのように補足するか」、「価値をどう作りこむか」をグループワークで議論しながら、製品・サービス・ビジネスを企画、開発、設計するシステムティックな方法論をプロジェクト形式で学ぶ。
<b>技術基盤企業のプロジェクトマネジメント</b>	プロジェクトマネジメントの基本を習得し、新製品開発、新規事業への応用方法を学ぶ。新規事業開発、新製品開発、ビジネスモデル開発などにおいては、プロジェクトを計画し、進捗管理を行い、定義された目的を達成する。プロジェクトマネジメントを疑似体験し、その意義と課題について考える機会を提供する。	<b>技術経営研究方法論</b>	科学的アプローチとして求められる研究方法と論文執筆に関する知識を学ぶ。本講義では、技術経営に関する修士論文の要件を理解した上で、研究方法と論文執筆に必要な基礎知識を身に付ける。リサーチ戦略の種類と研究フレームワーク、既存文献のレビュー方法を中心に講義を行う。
<b>新技術および新事業の提案・企画・評価演習</b>	事業計画策定の基礎知識と技能を修得し、模擬的な計画案を策定する演習を行う。本講義は、新技術および新事業の提案、企画、評価に関する実践的な内容とする。受講生が、技術マーケティング、市場予測、ファイナンス、会計、技術・知財評価、事業価値評価などの知識を総合的に活用し、ビジネスプランを作成する。	<b>研究開発戦略</b>	研究開発投資に関する不確実性を克服するための戦略論について、理論・事例の両面から学ぶ。本講義では、企業が研究開発を実施し、イノベーションに結びつけるまでの不確実性を考察し、これを克服してイノベーションを実現するための戦略論を提示する。具体的な事例と議論を通じて研究開発戦略立案に必要な知識を習得する。
<b>技術・事業評価論</b>	企業が所有する有形・無形の技術資源に関する事業価値の評価方法を学ぶ。本講義では、技術・事業評価の意義、目的、技術の探索、普及、予測などについて学びつつ、技術(知的財産を含む)と事業の価値算定の基本的な考え方を講義とグループ演習を通じて習得する。	<b>技術倫理</b>	技術倫理の基本的な考え方と事例について学ぶ。本講義では、技術倫理の基本を理解した上で、技術倫理が問われた代表的な事例をとりあげながら議論を進める。組織やチームを率いるリーダーとしての責任についても考察する。
<b>技術経営史</b>	技術経営の多様な歴史事例の学習を通じて、イノベーションの本質と文脈的特性を学ぶ。本講義では、歴史的事例を活かして、技術経営の実践演習を行う。特に、技術と製品、市場の展開を統合的に洞察する演習を通して、技術経営の本質を把握する。さらに、テクノロジーと技術経営の文明の盛衰における役割について考察する。	<b>サービスイノベーション</b>	デジタル技術を活用して付加価値の高い製品やサービスを創出する手法について学ぶ。本講義では、プロダクトの状態やビジネス環境を予測し最適化するモデルベースアプローチ、及びシステムズエンジニアリングの基礎を概観した上で、グループワークを通じてデジタル技術を駆使したサービス革新力を身につける。
<b>技術基盤企業の戦略経営</b>	技術を基盤とする企業にとって必要な戦略経営の基礎を学ぶ。本講義では、企業の戦略及び戦略経営に関わる基本概念を提示し、理論のみならず実際の事例に即しながら、戦略経営の枠組みについて概説する。産業界や技術の発展過程と戦略経営の関係を検討した上で、ハイテク産業と成熟産業における戦略経営を分析する。	<b>国際知的財産</b>	諸外国の知的財産制度の基礎知識に加えて、知的財産の観点から企業の競争力を学ぶ。知的財産のグローバル化に対応するためには、諸外国の知的財産制度、裁判制度、判例、及びこれまでの企業側の対応の事例を把握する必要がある。本講義では、知的財産の国際的な意義、具体的な法制度、判例、及び事例について学習する。

**平日夜間・土曜開講科目は、時間割にて確認してください。**

<b>企業リスク・マネジメント</b>	企業を取り巻くリスクとそのマネジメントについて体系的に学習し、リスクへの対応力を身につける。今日の企業環境は変化のスピードが速く、リスク・マネジメントの重要性が高まっている。本講義では、リスク・マネジメントの意義と基本概念を概説した上で、事例研究や討議を交えながら、リスク測定的手法等について学習する。	<b>意思決定論</b>	技術リスクを適切に管理しながら事業化を判断するための意思決定について学ぶ。ディスカッション中心の双方向講義とケーススタディにより、企業戦略、技術開発、個人のキャリア開発における意思決定の体系を理解し、理論と実践的技術を習得する。
<b>バリューチェーンマネジメント</b>	モデリングツールを使ったバリューチェーン設計、業務改革の手法について学ぶ。バリューチェーンマネジメントとは、戦略実現のためにオペレーションを統合、最適化する概念である。本講義では、オープンイノベーション等の重要概念を学びつつ、モデルベースでバリューチェーンマネジメントを最適設計する演習を行う。	<b>イノベーション戦略論</b>	イノベーションを企業の成果に結び付けていくための視点や分析手法を学ぶ。企業はイノベーションの担い手であるが、それは企業側の論理のみで成立しない社会的活動である。本講義では、①イノベーションの本質、企業経営への影響、②イノベーションを生み出していく企業組織、③経営成果に繋がる戦略を中心に講義を行う。
<b>起業家戦略</b>	アントレプレナーシップを理解し、スタートアップ企業の特徴と戦略について学ぶ。本講義では、ベンチャー企業の特徴を理解した上で、戦略論、方法論、プロセス論などの理論的なフレームワークに加え、スタートアップ企業のジレンマ、ステージごとの戦略について議論する。	<b>ITマネジメント</b>	企業経営に情報技術を活用するマネジメント(ITマネジメント)について学ぶ。ITマネジメントのための経営学の基礎と経営情報論について概観し、現状と課題を整理する。ITマネジメントの主要課題について、論文購読と学生による発表・討議を通して考察し、理論と実践の融合を図ったインタラクティブな講義とする。
<b>管理会計概論</b>	組織における資源配分の計画と業績評価について、会計数値を利用して分析する手法を学ぶ。講義では、①管理会計と会計測定の基本的概念と方法、②経営管理行動で必要となる管理会計モデル、③意思決定を支えるモデルとキャッシュフローベースの会計情報との関係について説明する。	<b>特殊講義(イノベーション・ダイナミクス)</b>	新技術が市場に普及する中で、イノベーションが形成される過程を学ぶ。イノベーションは、誕生、発展、成熟といったライフサイクルを経て社会に普及する。モデリング・シミュレーション技術の習得を通じて、イノベーションの動的な挙動を分析し、戦略的にマネジメントする方法について理解する。
<b>先端科学技術とビジネス</b>	製造業・サービス業を中心として、産業界における先端科学技術の応用を学ぶ。本講義では、様々な業界から招聘する専門家による講義を通して、先端科学技術をビジネスにつなげるための要件を技術経営の視点から捉える。さらに先端科学技術からビジネスへの展開を促進するための仮説について議論する。	<b>MOTキャリアデザイン</b>	人がキャリアをデザインする、つまり自分自身の生き方や働き方を描いていく際に参考となる様々な視点を学ぶ。それを自分自身のキャリアに当てはめて考えることを通じて、自分のキャリアをデザインする力を身につける。
<b>生産プロセスマネジメント</b>	ものづくりイノベーションの実践的考え方と手段について学ぶ。本講義では、歴史的な生産プロセスの進化について概観した上で、グローバルな視点での生産経営の在り方を考える。ものづくりで成功する要素について、顧客満足と経営満足とを両立させる全体最適の観点に立ち、実践的な演習を行う。	<b>特殊講義(意思決定のためのデータ分析)</b>	意思決定を支援するデータの収集・分析・可視化の手法について学ぶ。本講義は、オープンデータや統計データなどの2次データ利用に加え、現地でのフィールドワークやGISツールを用いた新たな1次データ生成に取り組み、社会課題をデータドリブンで解決する力を身に付ける。
<b>特殊講義(知財情報工学)</b>	企業の戦略に基づき、どのように知財情報を調査し、戦略的に活用するかを学ぶ。本講義では、模擬的な研究開発を想定し、研究開発に資するヒントを知財情報(特許文献等)から抽出し、また、知財情報に記載された発明を回避し、より良い製品にするための方策を検討する。また、意匠及び商標の検索について学ぶ。	<b>特殊講義(交渉戦略と実践)</b>	事例や交渉ゲームを通じてビジネスにおける交渉戦略について学ぶ。ビジネスにおける交渉力次第で、企業の戦略的立場が変化する。本講義では、ディスカッション中心の双方向講義とケーススタディにより、企業戦略やキャリア開発における交渉の戦略と実践技術を習得する。
<b>技術系ベンチャー論</b>	技術系ベンチャー企業を題材として、創業からExit(上場、M&A等)へと至るプロセスについて学ぶ。技術系ベンチャーの事例研究を通じて、技術経営ベンチャーの創業からExitまでの実態、日米のベンチャー環境の違いについて学習する。また、ベンチャー企業の創業、経営を行うために必要となる事項について学ぶ。	<b>特殊講義(外書講読・英語ディスカッション)</b>	外国書籍を読み、英語読解力を身に付けるとともに、技術経営に関する基礎的な知識を学ぶ。本講義では、外国書籍を輪読し、記載されている理論などを題材としたプレゼンテーション及びディスカッションを行う。英語での文章構成を学び、輪読による発表を通じて、理解をどのように伝達するかを考えることができる。
<b>ヘルスケア・マネジメント</b>	ヘルスケア事業の知識と商品開発、テーマ企画と実用化について学ぶ。本講義では、ヘルスケア分野を題材として、イノベーション創出のための着想力、テーママネジメント力、実用化推進力の向上を図る。ヘルスケア分野を取巻く社会的背景や市場の特性について把握し、企業や事業、商品、研究開発の事例分析を行う。	<b>Technology Management I</b>	This course is concerned with the philosophical perspective of technology management in human resource development, i.e. fostering education of new professionals, capable of integrating managerial skills and technologies. This course aims to extend students' global outlook through the English usage. Students will enrich their knowledge in technical terms in innovation studies in the English language.
<b>Technology Management II</b>	This course provides learning opportunities in the field of software engineering from the new perspective of technology management. Literature review of management of technology, especially in the field of software engineering innovation in Japan, will constitute the first part of this course, and students will be required to select journal articles in their own research interests and make presentations at class.	<b>Technology Management III</b>	This is an introductory-level modeling and simulation course for practicing technology and innovation management. Innovative technologies such as internet and mobile phone tend to diffuse in a market indicating typical s-shape trajectory overtime. We learn the basics of modeling and simulation techniques to evaluate long-term, dynamic behaviors of innovation diffusion. No prior modeling and simulation experience is required.
<b>Technology Management I・II</b>	This course introduces the latest issues and relevant problem-solving disciplinary in technology management. Due to the increasing velocity of market and corporate change, both theories and practices of MOT necessitates constant updates; that is, both theorists and practitioners are severely pressurized to rebuild the scope as well as the vector of methodological applications, in accordance to their dynamic view of technology management. This course provides active learning experience of the kinetics of theory and practice of technology management through debating the most recent topics.	<b>プラクティカムⅠ・Ⅱ</b>	企業内のMOT関連部門等で長期実習(通常3ヶ月から6ヶ月)を行う課題解決型企業実習である。企業が実際に直面している課題を知り、MOTの理論や手法を用いて解決策を提案する。技術経営に関する理論等を実践する場であり、実践を通じて技術経営の意義と役割への理解を深め、課題解決のための戦略等を立案できる能力を培う。また、社会に貢献でき、計画的に業務や研究等を実践することができる能力を培う。
<b>技術経営演習Ⅰ</b>	博士課程前期課程1 回生における研究指導科目である。研究倫理について学びつつ、修士研究テーマとなる技術経営課題の探索を行う。また、研究指導教員の助言指導を得ながら、修士研究テーマに関連する国内外事例の調査、及び先行研究の調査等を実践し、研究計画書を作成する。	<b>技術経営演習Ⅱ</b>	博士課程前期課程1 回生における研究指導科目である。研究倫理について学びつつ、修士研究テーマとなる技術経営課題の設定を行う。また、研究指導教員の助言指導を得ながら、修士研究テーマに関連する先行研究の調査、研究方法の調査を実践し、修士研究の構想について発表する。
<b>技術経営研究Ⅰ</b>	博士課程前期課程2回生における研究指導科目である。研究倫理について深く理解した上で、各自の修士研究テーマについて、研究指導教員の助言指導を得ながら修士論文としての構想を練る。	<b>技術経営研究Ⅱ</b>	博士課程前期課程2回生における研究指導科目である。研究倫理について深く理解した上で、各自の修士研究テーマについて、指導教員の助言指導を得ながら研究成果を修士論文として纏める。



科目群	科目名称	科目分野										
		MOT関連科目					経営関連科目			研究手法と社会実装、他		
		テクノロジー・マネジメントの概念的理解	研究開発マネジメントの実践と発展	イノベーションとアントレプレナーシップ	デジタル&オペレーションマネジメント	知的財産マネジメント	企業事業戦略	会計財務マネジメント	組織・人材マネジメント	研究手法データ解析	デザイン&システム思考	社会実装、他
基礎科目	技術経営論Ⅰ	●										
	技術経営論Ⅱ	●										
	技術経営論Ⅲ	●										
コア科目	戦略的技術開発論		●									
	価値創出マネジメント									●		
	新技術および新事業の提案・企画・評価演習			●								
	技術基盤企業のプロジェクトマネジメント				●							
	技術・知財関連法					●						
	知財戦略論					●						
	技術基盤企業のマーケティング									●		
	会計・財務						●					
	ファイナンス戦略						●					
	技術経営組織論							●				
プログラム科目	技術基盤企業のヒューマンリソースマネジメント							●				
	技術経営研究方法論								●			
	Technology managementⅠ	●										
	Technology managementⅡ	●										
	Technology managementⅢ	●										
	特殊講義(外書講読・英語ディスカッション)										●	
	Special Lecture										●	
	ブラクティカムⅠ										●	
	ブラクティカムⅡ										●	
	展開科目	先端科学技術とビジネス		●								
研究開発戦略			●									
技術・事業評価論			●									
技術倫理			●									
技術経営史			●									
サービスイノベーション										●		
イノベーション戦略論				●								
起業家戦略				●								
特殊講義(イノベーション・ダイナミクス)				●								
技術系ベンチャー論				●								
意思決定論					●							
バリューチェーンマネジメント					●							
ITマネジメント					●							
生産プロセスマネジメント					●							
国際知的財産						●						
特殊講義(知財情報工学)						●						
技術基盤企業の戦略経営							●					
特殊講義(交渉戦略と実践)								●				
管理会計概論								●				
企業リスク・マネジメント									●			
MOTキャリアデザイン									●			
特殊講義(意思決定のためのデータ分析)									●			
ヘルスケア・マネジメント		●										
特殊講義										●		
研究指導科目	技術経営演習Ⅰ・Ⅱ								●			
	技術経営研究Ⅰ・Ⅱ								●			

# 立命館MOTを選んだ学生の声



パナソニックホールディングス株式会社 課長  
博士課程前期課程1回生  
**川合 有 さん**

実務と学術、双方からのマネジメントが実現

技術革新が絶えず求められる昨今において、組織のイノベーション創出を高めるマネジメントの深化のみならず、新しいアイデアを持続的に生み出し、実行に移せる自律的人材の育成が重要です。これらを理論に基づき体現したいと考えて入学を決意しました。立命館MOTでの学びを通じて、実務でのマネジメントに学術的な視点も加わり、広い視野での判断が出来るようになる実感しています。MOT研究科の特徴は、学生が多様性に富んでいることです。授業でのグループワークやディスカッション等の交流を通じて新しい価値観を得ることができるので、自身の考えのアップデートに役立つでしょう。



ヤンマーパワーテクノロジー株式会社電動化推進部 戦略G  
博士課程後期課程3回生  
**福留 未菜 さん**

仕事に関連する研究を働きながら進めることができる

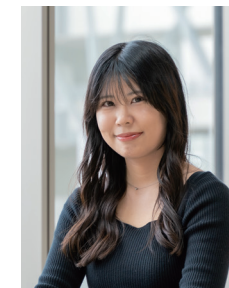
入社以来、産業用ディーゼルエンジンの開発業務に携わってきました。エンジンから電動化へのシフトが進む中、市場要求と技術の双方を把握しながら商品コンセプトを創造することに興味をもち始めました。技術を活かすマネジメントを体系的に学ぶだけでなく、仕事内容に関連する分野の研究を働きながらでも進められる環境と指導教官の理解があったことで、後期課程に進学しました。現在は、電動化の普及とカーボンニュートラル達成の関係について、システムダイナミクスを用いた研究を行っています。MOT進学をきっかけに、多様化する産業用パワーソースの商品戦略立案へと担当業務が変わり、授業で学んだ手法を翌日から実践するなど自律的に取り組んでいます。



立命館大学 理工学部出身  
博士課程前期課程2回生  
**鷺坂 幸祐 さん**

価値ある製品の創出に多種多様な意見が活きる

市場には様々な製品がありますが、残り続ける製品、価値ある製品の創出には、「アイデア出し」という工程が重要です。社会ニーズに応え、技術力を活かすことで価値ある製品を生み出していく方法を学ぶためにMOT研究科に進学し、アイデア創出法のシナリオ生成を改善する研究を行っています。将来はプログラミングや設計などの理系の知識に留まらず、MOTを活かして製品開発の上流・下流に関わる仕事に就きたいと考えています。MOT研究科の学生は、多種多様な考え方や知識にも違いがあります。授業内でのグループディスカッションでは、別の角度からの意見を多く聞くことができるので、貴重な経験を得られ、深く考えさせられる点でとても有意義です。



立命館大学 情報理工学部出身  
博士課程前期課程2回生  
**渡邊 優佳 さん**

学びを上げ、デジタル推進社会を牽引

学部生の頃から学んできた機械学習やソフトウェア開発の技術が、実社会でどのように活用できるのか学びたいと思い、MOTへの進学を決めました。現在は、「教育のDX」をテーマにして、ケースメソッドに生成系AIを活用することの効果を検証しています。情報理工学部で身につけたIT技術の知識とMOT研究科での学びを活かして、将来はITを存分に活用したDX推進に携わりたいと考えています。MOT研究科では、異なる専攻から来た学生、留学生や社会人など様々なバックグラウンドを持った人と関わる機会が多く、多くの刺激を受けられます。ブラクティカムなどの制度もあり、企業が実際に抱えている問題に取り組むことが出来ることも特徴のひとつです。



立命館アジア太平洋大学 国際経営学部出身  
博士課程後期課程2回生  
**WU Dongjian さん**

イノベーション創出と市場での競争力を高める

将来は、実社会における経営課題の解決に寄与できるコンサルタントになりたいと思い、MOT研究科に進学しました。研究科では製品やサービスを商品化・産業化するまでのプロセスに関する学問、すなわちイノベーション創出の仕組みを学んでいます。身に付けた知識と能力を駆使することで、将来は、独自性・新規性の高いイノベーションを生み、市場での競争力を図るような会社の一助になりたいと考えています。MOT研究科では、優しく親切な先生方に会えました。研究に詳しくない新入生の時から、興味を持って質問したことに対して、親切丁寧に指導してくださいます。学生が自由に楽しく研究を行える環境であることから、MOT研究科を皆さんに勧めたいと思います。




株式会社近鉄エクスプレス 常務執行役員  
博士課程後期課程1回生  
**齊藤 真 さん**

経験・知見を活かし、さらなる成長に向けた技術経営

海外駐在を経験して、今後も変化する事業環境に柔軟に対応するには、これまでの経験と知見だけでは限界があることを痛感しました。海外企業のエグゼクティブには博士学位取得者も多いことから、技術経営の形式知化、体系化を学ぶMOT研究科に入学しました。現在は物流データの多面的な活用に関する研究を進めていますが、経営全般について深く考察し、文章化することで論理的思考力の育成に役立っています。研究室には様々な出自の学生が集い、研究テーマも多岐にわたることから、取り組み方、進め方も多様であり、研究の進捗発表を通じて多くの発見を得る毎日です。




# 実務経験豊富な教員・講師陣



**青山 敦** *Atsushi AOYAMA*  
教授 / Ph.D. (バテュー大学) (株)DataVision代表取締役

<研究分野>  
研究開発マネジメント、イノベーションマネジメント、価値の探究と創出、デジタルトランスフォーメーション、リスクマネジメント


<経歴> 三菱総合研究所、英国ロンドン大学インペリアルカレッジ研究員、東京工業大学資源化学研究所助教授



**枝川 義邦** *Yoshikuni EDAGAWA*  
教授 / 博士(薬学、東京大学) 経営学修士(専門職、早稲田大学)

<研究分野>  
人を中心とした経営システム、脳神経科学、マーケティング、人材育成、組織開発、新規事業開発


<経歴> 名古屋大学助手、早稲田大学准教授・教授、カリフォルニア大学ロサンゼルス校客員研究員等



**小田 哲明** *Tetsuaki ODA*  
教授 / 博士(工学、東京大学)、弁理士、米国弁理士

<研究分野>  
知財戦略、知財マネジメント、医療福祉


<経歴> フィナガン法律事務所(米国)、スタンフォード大学APARC客員研究員、大阪大学工学研究科特任准教授、東京大学未来ビジョン研究センター特任准教授



**角楚 恭央** *Yasuo KADONO*  
教授 / 博士(経営学、筑波大学)、工学修士・学士(京都大学)

<研究分野>  
経営情報、技術経営、競争戦略、経営学


<経歴> 住友金属工業(現日本製鐵)、マッキンゼー(日米韓)、アクセントチュア、経営科学研究所(MSI)創業、スロベニアEMUNI大学客員教授



**黄 巍** *Wei HUANG*  
准教授 / 博士(経営学、東京大学)

<研究分野>  
製品開発論、イノベーション・マネジメント、ものづくり経営

<経歴> 東京大学経済学研究科特任助教、特任研究員



**澤口 学** *Manabu SAWAGUCHI*  
教授 / 博士(工学、早稲田大学)

<研究分野>  
商品企画・開発マネジメント、イノベーションマネジメント、持続可能なカイゼン活動、デザイン思考型リスクマネジメント

<経歴> 鉄鋼系商社、産業能率大学教授、早稲田大学大学院創造理工学研究科経営デザイン専攻教授

ICTの進歩には目を見張るものがあり、画像／音声／テキスト／バイタルデータ／センサーデータなど多様な情報を大量／高速／安価に距離の制限なく人や機械から収集し複雑な処理を行い、人や機械にフィードバックすることが可能になりつつあります。ICTの特徴を活かし、イノベーションをシステムティックに創出しビジネスを持続可能にする方法を研究しています。ICTの社会受容性研究も行っています。たとえば、ICT活用介護サービスが事業者／介護者／高齢者／家族／地域社会に受け入れられる条件を解明しようとしています。ICTを活用してビジネスマネジメントそのものを革新する研究も行っています。計算機による自然言語処理によって企業内に存在する膨大な情報資源を高度に活用し、ICTと行動科学を組み合わせることで、企業を良い方向に誘導できると考えています。


経営資源における「ひと」の役割は、ますます重みを増しています。他の経営資源を活かすことからイノベーションの創出を支えることまで、あらゆる場面で人の活躍が望まれます。近年では、脳の働きを可視化する技術の進展が著しく、私たちの日常生活や仕事を支える多くの場面で脳の活動性を計測し、その結果を解釈できるようになってきました。このような新しい技術を活用し、経営学や経営工学、脳神経科学・生理学、認知科学など、歴史を重ねる複数の研究分野を融合させた多層的なアプローチをすることで、世の中をシステムとして捉え、その一場面を解釈し、社会に活かすための研究をしています。様々な分野への興味を持ち、それらを融合させ、ものごとの解明や実社会での展開について学術的なアプローチを進めることに興味をお持ちの方を歓迎しています。

専門分野は、知財マネジメント、地域ブランド、ウェル・エイジングです。「知的財産(特許)を活用した経営戦略」として、企業の知的財産活動について研究しています。①ケーススタディを中心とした特許・デザイン・ブランド戦略分析、②データ解析による知的財産評価、③地域ブランドの活性化、④産学連携などについて研究しています。知的財産にはデザイン・ブランドも含まれ、とても身近なものです。また、近年はウェル・エイジングの研究にも取り組んでいます。企業経営や高齢化社会において健康維持を図ることは、人生100年時代の到来により注目されている分野です。企業の戦略や健康データを分析できる柔軟かつ学習熱心な学生、企業へのインタビューを行える積極的な学生を希望します。

経営戦略と情報技術(IT)に関する分野で研究とコンサルティングに取り組んできました。主なテーマは、企業組織・社会とITの関係性を経営学の理論を用いて解明することです。例えば、企業経営におけるITの有効な活用、ITベンダーのソフトウェア工学能力評価、アジアの電子商取引等です。DX、SNS等を含むイノベーションと社会の進化に関わるテーマにも広く興味を持って研究しています。自分が感じた具体的な問題意識に根ざし、世界の知見を活用した無垢なアイデアが、不確実性を増すこれからの社会に大きく貢献するでしょう。皆さんが「イノベーションで世界を変える」という高い志をもってチャレンジする姿を楽しみにしています。主要著書：“Management of Software Engineering Innovation in Japan”(Springer)、「ビジネス価値を創造するIT経営の進化」(日科技連)等。

研究分野は製品開発論、イノベーション・マネジメント、ものづくり経営です。これまでは継続的な開発活動の特徴とする製品・産業における効果的な開発パターンについて調査・研究を進めてきました。現在はデータ(開発プロジェクトデータと産業データ)解析によるゲーム産業の開発活動に関する実証研究、ICTを活用した組織課題の可視化、ものづくり現場データの集約・連携について研究しています。当研究室は事例研究、統計分析及びマルチエージェント・シミュレーションなどの手法を用いて技術経営に関する研究を幅広く行っています。論理的思考能力及び実証研究能力の構築に粘り強く取り組み、主体的に学ぶ学生を希望します。


澤口研では「社会マクロ環境と技術の発展を意識した商品企画メソッド」や「新興国と日本との持続可能なモノづくり」を主な研究テーマにしております。従って、常に企業との連携も考慮して理論と実践の両立を目指します。また本格的なAI時代の到来を見据えて、「AIに適したモノ・コトづくりアプローチ」も最近のテーマです。さらに近年は、COVID-19に象徴されるような時代の変革期を意識して、「不利益(Benefit of inconvenient)」や「対極発想」によるデザインメソッド」などユニークなイノベーションにも挑戦しております。いずれも価値創造の研究テーマです。これらのテーマに興味を持たれた学生は、社会人、留学生も含めて大いに歓迎いたします。最近の著書：「不利益の実装(共著)」(近代科学者Digital)、「はじめての企画・開発メソッド(単著)」(同友館)など



**田中 邦明** *Kuniaki TANAKA*  
教授 / 博士(工学、法政大学)

<研究分野>  
生産システム、ものづくりシステム、生産戦略


<経歴> オムロン(株)ものづくり革新本部生産技術センター長、オムロングループ企業の生産会社(マレーシア)、設備製作会社(中国)



**長平 彰夫** *Akio NAGAHIRA*  
教授 / 博士(経営学、東北大学)

<研究分野>  
研究開発マネジメント、イノベーション・マネジメント、リスク・マネジメント、知的財産マネジメント


<経歴> 北海道東北開発公庫(現日本政策投資銀行)、通商産業省(現経済産業省)資源エネルギー庁、東北大学大学院教授



**名取 隆** *Takashi NATORI*  
教授 / 博士(工学、東北大学)

<研究分野>  
技術経営、中堅中小・ベンチャー企業論、新製品・新事業開発、オープンイノベーション


<経歴> 日本開発銀行(現日本政策投資銀行)



**古田 克利** *Katsutoshi FURUTA*  
教授 / 博士(技術・革新的経営、同志社大学)

<研究分野>  
経営管理論、人的資源管理論、組織行動論、産業・組織心理学、カウンセリング心理学

<経歴> 富士通(株)、(株)松下情報システムテクノロジー(現 パナソニックシステムデザイン(株))、関西外国語大学英語キャリア学部准教授



**湊 宣明** *Nobuaki MINATO*  
教授 / 博士(システムエンジニアリング学、慶應義塾大学)

<研究分野>  
マーケティング、技術経営、デザイン科学、システム・ダイナミクス、宇宙・航空イノベーション

<経歴> 宇宙航空研究開発機構、慶應義塾大学助教、特任准教授、シンガポール国立大学客員研究員

グローバルでの急激で様々な環境変化は製造企業に大きな変革を求めています。日本の製造企業が再びグローバル競争力を獲得するには、これまで培ってきたものづくり競争能力を磨き続け、更にIoT/ロボット/AIなどの新技術を取込んだスマートファクトリーに代表される次世代ものづくりシステムを構築することが解決策の一つになります。次世代ものづくりシステムは、ものづくりに関する全プロセスをモジュール構造化の概念をベースに最適化することで実現できると仮説し、現実の製造企業の具体的課題を踏まえながら革新的コンセプトの提言や具体的方策についての研究を行います。ものづくりに課題認識を持ち革新的コンセプト構想力、その実現に向けたマネジメント力や実践力を磨くことで、ものづくりに牽引する企業人としての活躍領域が大きく広がります。

北海道東北開発公庫(現日本政策投資銀行)を経て、東北大学大学院工学研究科の教授に就任し、2019年4月から立命館大学教授に。技術経営分野の中で、企業の研究開発マネジメント、とりわけ新製品・新サービスプロセスマネジメントを研究し、新製品・新サービス開発の前段階(ファジー・フロント・エンド)が新製品・新サービスの成功に大きく寄与することを2008年の国際学術誌において世界で初めて明らかにしました。また、特許データを用いた経済分析において、従来の被引用数だけでなく、属性として、特許異議申立、無効審判の数、IPC分類数、発明者数、外国出願の有無の、複数の属性を用いた属性統合指標が有効であることを実証し、研究・イノベーション学会から最優秀論文賞を受賞しています。定量解析にもぜひ興味をもっていただきたいと思います。

私は中堅中小・ベンチャー企業を対象に、イノベーション創出(新製品・新事業開発、オープンイノベーションを含む)、技術マーケティング、競争戦略などを研究してきました。金融機関に約30年勤務し、多くの分野、業界の調査経験があるため、どんなテーマでも対応できる点が強みです。ゼミの学生は、研究テーマを自由に選択しており、業種などの限定はなく、多方面に亘っています。学生の研究テーマは、マーケティング、イノベーションの普及、新製品・新事業開発の分野が従来は比較的多く、近年ではネット、スマホアプリ、ゲーム関連のテーマが増えています。研究方法は、アンケートデータ等の統計分析による定量分析と、事例分析等による定性分析のどちらも指導が可能です。皆さんにはユニークで挑戦的な研究を期待しています。

専門分野は、経営管理論、人的資源管理論、組織行動論、産業・組織心理学、カウンセリング心理学です。これまで「人と組織に着目したグローバル企業によるイノベーション創出の国際比較研究」「理系女性研究者の出産・育児と多様なキャリアの形成に関する縦断研究」「第三段階教育における往還的コンピテンシー形成と学位・資格枠組みの研究」等の研究プロジェクトに携わってきました。現在は、組織で働くプロフェッショナル人材のマネジメントに関する研究を行っています。ダイバーシティ・マネジメント、組織開発、リーダーシップ、キャリア開発、健康経営等、興味関心の幅は広いですが、その中心にある研究対象はイノベーションを生み出す人と組織です。社会科学の学術知を創出する方法や、体系的な知を実践に生かす方法を大学院で学んでみませんか。

宇宙航空研究開発機構(JAXA)での勤務とフランス留学の経験を経て、大学で技術経営学、イノベーション、製品設計、ビジネス開発の教鞭を執るようになりました。私の専門はマーケティング論、航空宇宙管理学、システム工学で、宇宙航空領域でのシステム設計やマネジメント技術をビジネスの最適化や意思決定に応用することが強みです。全体と部分のバランスを重視したシステムデザインに基づき、技術起点的な製品・サービス設計、事業化と普及戦略、社会技術システムの長期的なシミュレーション評価を主な研究対象としています。イノベーションは個性の邂逅と融合から生まれると考え、研究室として多様な学生が自由にテーマを探究する「研究のサファリパーク」を目指しています。

## ゲストスピーカー

現場の第一線で活躍する実務家や国内外の一流企業および最先端研究機関から招聘しています。(過年度実績)

(敬称略・役職名は招聘時のものです)

持田製薬株式会社
事業開発本部 知財担当理事 石川 浩
日本光電工業株式会社
シニアフェロー 永田 鎮也
湯快リゾート株式会社
代表取締役社長 西谷 浩司
SAPジャパン株式会社
SAP University Alliances Lead 阿部 理央
東北大学
工学研究科 特任教授 泉 秀明

株式会社鴻池組
建築事業総轄本部技術統括部 担当部長 岩下 智
早稲田大学
教授 三原 康司
三菱電機株式会社
本社 人事部 人材開発センター 主管講師 織田 昌雄
オムロン株式会社
GPQ物流統轄室国際物流部 経営基幹職 中村 正
日鉄ケミカル&マテリアル株式会社
執行役員 コンポジット事業部長 下条 憲一

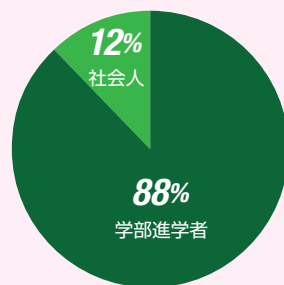


# 学生の進路と支援組織

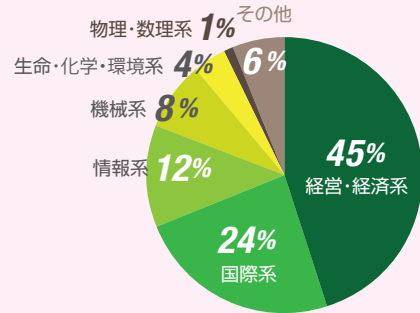
## 主な内定先・就職先一覧 ※過去の修了生を含む

アクセンチュア(株)	塩野義製薬(株)	日亜化学工業(株)	本田技研工業(株)
アース製薬(株)	(株)資生堂	ニチコン(株)	三菱商事(株)
旭化成(株)	(株)島津製作所	日本アイ・ピー・エム(株)	三菱電機(株)
アビームコンサルティング(株)	ジョンソン・エンド・ジョンソングループ	日本通運(株)	(株)三菱UFJ銀行
(株)イシダ	Sky(株)	日本電気(株)	三菱UFJモルガン・スタンレー証券(株)
NTTコミュニケーションズ(株)	住友電気工業(株)	日本電産(株)	(株)村田製作所
オムロン(株)	(株)セブン・イレブン・ジャパン	(株)野村総合研究所	LINEヤフー(株)
キヤノン(株)	ソフトバンク(株)	(株)博報堂プロダクツ	ヤマハ発動機(株)
キューピー(株)	TIS(株)	パナソニック コネクト(株)	ユニ・チャーム(株)
(株)キーエンス	東京ガス(株)	(株)日立製作所	楽天(株)
経済産業省	東京電力ホールディングス(株)	富士通(株)	リコージャパン(株)
KDDI(株)	トヨタ自動車(株)	(株)船井総合研究所	ローム(株)

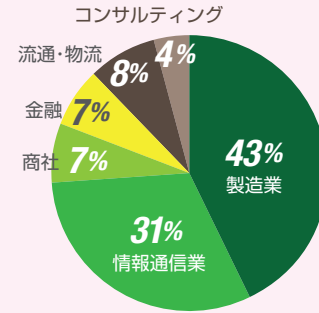
学部からの進学者と社会人学生の割合  
(学生数153名)



学部からの進学者の出身学科



2024年3月修了生の主な内定先業種



## 奨学金・研究助成制度 (詳細は入学試験要項)

- 立命館大学独自の奨学金・研究助成** 1年次対象成績優秀者奨学金、2年次対象成績優秀者奨学金、学生会奨学金、研究実践活動補助金、英語論文投稿支援補助金、ティーチング・アシスタント(TA)等
- 学外機関による奨学金・支援制度等** 日本学生支援機構大学院奨学金、民間財団・地方公共団体奨学金、日本学術振興会特別研究員制度等

## RIMOT(立命館MOT校友会)

RIMOT(立命館MOT校友会)が、修了生ばかりでなく在学生とともに学ぶことができる「知識創造の場」を提供します。850名以上のメンバーを持つRIMOTのネットワークは、必ずあなたに価値をもたらします。



今井 雄基 さん 博士課程前期課程修了/ネットワンシステムズ株式会社(ネットワンパートナーズ株式会社に出向)

### 修了後は“Re”MOTできます。

RIMOTは立命館MOTの修了生を中心とした校友会組織です。技術経営をテーマにした各種イベント(勉強会・セミナー・ワークショップ・工場見学等)を企画・運営しています。私は学部卒業後すぐに立命館MOTへ進学しましたが、MOTの価値を実感したのは社会人になってからでした。RIMOTの活動に参画して10年以上経ちますが、RIMOTメンバーを始め、現役学生や教授、外部講師の方々など、MOTを共通のキーワードとしながらも、様々な価値観を持った人との出会いが私の社会人人生を支えてくれています。修了後の活躍の舞台は全国・世界へと広がりますが、貴方がMOTに触れる機会はより一層増えていくことでしょう。RIMOTはこれからもMOTを究めていける場所を提供していきます。

# 入学試験情報

## 博士課程前期課程

入学定員/70名	標準修業年限/2年
----------	-----------

### <入試日程>

#### 2024年9月入学

	出願期間	試験	合格発表	入試方式
7月入試	5/30(木)~6/13(木)	7/7(日)	7/18(木)	一般・社会人・APU・外国人留学生

#### 2025年4月入学

	出願期間	試験	合格発表	入試方式
7月入試	5/30(木)~6/13(木)	7/7(日)	7/18(木)	一般・社会人・学内進学・飛び級・APU・外国人留学生
11月入試	10/10(木)~10/24(木)	11/17(日)	12/5(木)	一般・社会人・学内進学・飛び級・APU・外国人留学生
1月入試	12/5(木)~12/19(木)	1/26(日)	2/13(木)	一般・社会人・学内進学・飛び級・APU・転入学(情報理工学研究科とのジョイント・ディグリー、理工学研究科・生命科学研究科からの2年次転入学)
2月入試	1/9(木)~1/23(木)	2/15(土)	2/27(木)	一般・社会人・学内進学・飛び級・APU

## 博士課程後期課程

入学定員/5名	標準修業年限/3年
---------	-----------

### <入試日程>

#### 2024年9月入学

	出願期間	試験	合格発表	入試方式
6月入試	4/18(木)~5/9(木)	別途連絡	6/20(木)	一般(英語基準)
7月入試	5/30(木)~6/13(木)	7/7(日)	7/18(木)	一般(日本語基準)

#### 2025年4月入学

	出願期間	試験	合格発表	入試方式
11月入試	10/10(木)~10/24(木)	別途連絡	12/5(木)	一般(英語基準)
1月入試	12/5(木)~12/19(木)	1/26(日)	2/13(木)	一般(日本語基準)

### 選考方法 ※詳細は入学試験要項でご確認ください。

<博士課程前期課程>	<博士課程後期課程>
【一般・飛び級・外国人留学生】 小論文、面接 【学内進学・社会人・APU・転入学】 書類選考、面接	【一般(日本語基準)] 書類選考、面接試験、論文試験(修士論文あるいはそれと同等の著作物、および研究計画書をもって論文試験にあて、面接試験で試問を実施) 【一般(英語基準)] 書類選考、面接試験または電話等でのインタビュー(英語で実施)

### 入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)

博士課程前期課程	【知識・理解】	A.基礎科目で基礎専門的なMOT科目を学ぶことから、技術経営に関する理論、概念及び方法論を習得するために必要な学力を有する人材を受け入れる。
	【思考・判断】	B.研究開発、事業活動、知的資産活用などに関する事例分析能力を身につけたいと考える人材を受け入れる。 C.企業の現場の課題を解決する実習型の講義があることから、産業社会のニーズや、課題解決とイノベーション促進のために戦略、解決策等を考察するための基礎的な論理力、判断力を持つ人材を受け入れる。
	【関心・意欲・態度】	D.授業ではディスカッションやワークショップ形式を利用した双方向性を重視していることから、他者と連携、協調して計画的に業務や研究等を実践したいという意欲を持つ人材を受け入れる。
	【技能・表現】	E.質の高い課題研究論文や修士論文を完成させることから、技術や製品・サービスの事業化に必要な資料や情報を集め、科学的に探究し論理的に考察し、かつ表現するための基礎的な能力を持つ人材を受け入れる。 F.他者とコミュニケーションして計画的に研究等を実践し、表現する能力を身につけようとする目的意識を持つ人材を受け入れる。
博士課程後期課程	【知識・理解】	A.新たな価値創造をリードするためのアカデミックな視点での研究を推進することから、技術経営に関する高度な理論、概念及び方法論を習得するために必要な学力を有する人材を受け入れる。
	【思考・判断】	B.研究開発、事業活動、知的資産活用などにおける問題点や課題を見出し、かつ高度な問いを立て、新規性の高い発見をしたいと考える人材を受け入れる。 C.中核人材として戦略的・理論的な思考に基づいて行動を実践する視点での研究を推進することから、産業社会における課題解決とイノベーション促進のために高度な戦略、解決策を立案し、提案をしたいと考える人材を受け入れる。